

八重代かりす『白と黒の馴れ初め』\*起

白と黒の  
馴れ初め

八重代  
かりす

\*\*\*\*\*  
\*起・前編  
\*\*\*\*\*

「もっとも見こみのない愚か者は、自分が賢いことを知らない者だ」

……アイザック・アシモフ作『第二ファウンデーション』より

\*\*\*

ムスタファアがその男に声をかけた時、あまり期待はしていなかった。

「いらんよ。生憎、人手は足りているのでね」

眉間にしわを寄せた男は正則語がかった声調ではつきりと答える。

ムスタファアは「ああ、やっぱりねえ」と嘆息した。

少し前までなら、もつと粘るところだ。しかし、今の引き際はあっさりしている。何しろ、どんなに粘ろうが、そもそも相手に代価を支払うだけの余力が残っていないのだ。今回こそ相手の身なりが（ちよつと地味だが）整っているのです、試しに声をかけてみたものの、最近では目の前に人が通っても声をかけないことすら、ままあった。

なにせ、今、この国の景気は激烈に落ち込んでいる。そんじよそこらの落ち込みようではない。大王マルドゥックは精霊に嫌われているのだという噂がまことしやかに流れるくらいの落ち込みようだ。おかげで警察の出番が増えること増えること。いや、そんなことはムスタファア達には関係ない。これでも、不敬罪から距離を置くくらいの知恵はある。

問題はムスタファア達が遥々南方まで商品を仕入れに出向いた時には、むしろマルドゥックの即位を好意的に受け止める雰囲気があったことだ。もしそうでなかったなら、いくら博打好きのムスタファア達とはいえ、南方奴隷を百単位で仕入れるなどという真似はしない。おかげでせっかく集めた商品が売れ残ること、売れ残ること。ほとんど捨て値で、なんとか売りがねたものの、まだ、五十近くも売れ残っている。

「じゃあ、せめて、知り合いにいないか、奴隷を欲しがっている人？」

「いないな」

今度は通俗語で答える男。バリバリの通俗語を話すムスタファアに、男の方が合わせてくれたのだと気付いたのは、しばらく経ってからのことだった。

「いや、奴隷になってもいいから、食い扶持が欲しいという者なら、いくらかいるだろうがね」

「……」

これは予想以上にまずいことになっているのかもしれない。

——いっそ、北に移動すべきか？

この調子ではここで粘ったところで、残った奴隷の買い手は見つからないだろう。赤字になるのは目に見えているが、やむをえない。少しでも、投下した資金を回収せねばならない。となると、問題は移動手段である……。

そんな風にかこれからの算段を考えていると、誰かがムスタファの裾を引っ張ってきた。

「ねえ、ねえ、お腹減った」

その言葉の主は子供だった。

物乞いの餓鬼か——と、ムスタファはと、しっしつとその子供を追い払う。

「お腹減った。お腹減った。お腹減った。減ったお腹。減ったよーっ」

泣き喚く餓鬼。煩わしくなつてムスタファは怒鳴りつける。

「だー、もう、うるせえ！」

「だって、僕、お腹減ったんだもん」

「俺にや、関係ねーよ！」

「だって、僕、小父さんについて行きなさいって言われたもん」

そう言われて、ムスタファはまじまじとその子供——フアティム幼児を観察した。

形成している干涉紋の虚ろさからして、五歳にも届かない筈なのに、何故か曲がっている背筋。樹皮の様な褐色の肌。うみたぬき海狸の様な前歯の見える半開きの口元。飢えていることを抜きにしても随分と痩身で、すらりと言うよりもひよろりとした体軀。まったく整えられていない波状毛の黒髪の下には、重そうな目蓋を一生懸命に開いている様な細い焼け土色の眼。そして……。

幼児は押し黙ったムスタファを見上げて「えへへ」と笑った。

——なんとなく、馬鹿みたいな顔だよな、こいつ。……いや、それより

それより、この子供の脚には木製の枷が付いていた。簡単な作りの安物で、最近はいつのまにか鍵が外れていることが間々ある。その位、いい加減な代物である。だが、足枷は足枷だ。自由市民の子供が着けて歩くことはない。ムスタファは檻の方に眼を向けた。自分達の所有している売れ残りの奴隷達を納めている檻だ。よく考えてみれば、この檻も急ごしらえである。そもそも、奴隷の行動を制限するのは主にムスタファ達の鞭であり、他の道具はあくまでもその補助に過ぎない。それだけにこの木製の檻には隙間が多かった。流石に大人が通り抜けられるようにはなっていないが、痩せっぼちの幼子ならば通り抜けられないこともないかもしれない。つまり……、

「お前、売れ残りの南方サレンジ奴隷かよ……」

ムスタファは一瞬でもまともに取り合った自分が馬鹿に思えた。まあ、こっそり逃げ出さなかっただけ、マシかもしれない。もっとも、見知らぬ土地で無力な幼児が足枷付きで生

きていけるはずもないが……。

「サンジって、何がー？」 幼児は無邪気に問い返した。

「お前が、全然、売れない、奴隷なの！」

「ふうん、僕、奴隷なんだ」

「当たり前えだろっ」

わざわざ、足枷がはめられているのはなんだと思っていたんだよ——ムスタファは頭を抱えたくなってきた。

「じゃ、僕、お腹減った」

「お前やっぱり馬鹿か……いや、そうじゃなくて、それ位、我慢しろ！俺達だってやりくり苦しいのに、奴隷にまともに食わしやる飯なんてあるかっ！」

「ふうん、僕は奴隷なんだ」

「……さっきも言ったぞ、その台詞」

「でも、奴隷って、お腹いっぱい御飯を食べられないの？」

「ああ、少なくとも、手前みたいな奴はな。ほら、さっさと檻の中に……」

「じゃ、僕奴隷やめるー」

「阿呆かっ！やめられる訳ないだろう！」

「どうして、やめれないの？」

「おまえが奴隷だからだよ」

「じゃあ、どうして、僕、奴隷なの？ねえ、どうして、どうしてえ？」

「……………」

ムスタファはまともに取り合うことをやめた。段々怒りがこみ上げてくる。

あるいはこの餓鬼が本当に馬鹿なのかもしれない。怒気の裏側にあった冷静さがそう告げていた。だが、これは一つ見せしめにすべきだ。商売仲間をすべて合わせても、十人にも満たないムスタファ達が百人前後もの奴隷を支配できるのは、彼らの足でカタカタと音を立てる繋鎖でも、彼らを殴りつけ、踏みつけられる脅力でも、彼らが法に則って扱われているのだという理屈でもない。単に彼らが自分達に対して恐怖を抱いているからに過ぎない。もし、彼らが自分に一斉に歯向かってくれば、実のところ、自分達にそれを押さえる術はほとんどないのだ。だから、殴られねばならない。ここで恐怖を植えつけなければ、いずれ、自分の身が危うくなる。なに、これはこの餓鬼のためにもなることだ。

歯向かうものには鞭。ここで奴隷の立場というものをわからせてやらねば、これから先、本当に死ぬことになりかねない。

「ねえ、どうし……っ！」

ムスタファが腕を振り上げると、言いかけた餓鬼の口元が歪み、小さな体躯が吹き飛ぶ。

「この南人ぶせいがっ！」

今まで、関心を示さなかった売れ残り達に見せ付ける意味で大声を出す。

餓鬼はよほど体重が軽いのか、二三回、地面を転がった。

ムスタファは餓鬼に駆け寄り、既に血まみれになった顔にさらに蹴りかかる。

「ちよっと、甘く、されたからって、付け上がるん、じゃねえ！」

蹴り飛ばす過程で、何度か息と言葉が切れ切れになるが、構わず蹴り続ける。

餓鬼が「やめて。やめてよ」と無様に泣き叫ぶのが、だんだん心地よくなってくる。その

うち、あの生意気なことしか言わない口から、赤いものが吹き出てくる。口内が傷付いたのか。いや、さつき一丁前に腕で顔をかばったから、胴体を思いっきり蹴り飛ばしてやった。

肺か腹か、その辺りから血が上ってきているのかもしれない。死んでしまうかもしれない。

そんな考えがちらりと頭を掠めたが、なに構うものかとすぐに思い直した。遠くで別の作業をしていた仲間がこちらに気付いたが、特に止めようともしない。どうせ、この連中は二束三文でも売れそうにない不良品ばかりなのだ。まして、こんな頭のいかれた餓鬼なら、なおのこと。

ムスタファは嗜虐的な快感に身を委ねた。そして、鼻水と涙でグチャグチャの顔面に脚を振り下ろす。

その時「やめろ」と低い大人の声がした。それは脚が顔面を踏み付ける直前だった。

興が削がれて、ムスタファは脚をゆっくりと大地に下ろす。

「……まだ居たんですかい？」

あの男だった。先程まで奴隷を売りつけようとしていた男、整った身なりをしている割に地味な男——こいつは、怒っているのか？

「立ち去っていたのだがね。幼子の声を聞いてはな」

「あなたにや関係ないでしょ、これは俺達の所有物の管理問題だ」

「私は君に言っているのだよ。幼子に暴行を加えるなど、人たるものの行いではない。慈悲遍く慈愛深き《唯一の神》といえどもお赦しにはなられないだろう」

「……《唯一の神》、なんじゃそりゃっ」

「唯一絶対にして全知全能、天地の創造主にして、裁きの日の主催者、そして、何より慈しみ深いお方だ」

「……………ああ、わかった。わかったから」

目の前の男が宗教屋で、関わり合いにならない方が賢明だということとはよくわかった。

「あなたの前ではもう手出ししませんよ。それでいいでしょ」

そう言って、ムスタファは話を終えようとしたが、その男は引き下がらなかった。

「待て、その子は怪我をしている」

「だから？」

「放っておけば、大変なことになるかもしれない」

「それで？」男を小馬鹿にするようにムスタファはへらへらと笑う。「あのねー、奴隷が怪我する度に手当てなんざしていたら、俺達は飢え死にしちまうよ」

男は眉間に皺を寄せたまま、しばし黙り込んだ。怒らせたのか？まあ、それでも構わないが——とも思ったが、ひよっとしたら、元々こういう顔なのかもしれない。

いずれにせよ、面白半分にも男の様子を見守っていると、彼は表情を変えぬまま口を開いた。

「わかった。その子を私に譲ってくれ、五十ディナールでどうだ？」

「え、五十ディルハム？」

意外な方向に流れた状況にムスタファは驚いた。

「……うーん、微妙ですねえ。でも、確かにこの餓鬼じゃあ、そんなもんかも……しかし、物好きですねえ……こんな……」

「私は五十ディナールと言ったのだがな」

先程の比ではない驚きがムスタファを商人にあるまじき沈黙へ追い込んだ。

「………い、今、五十ディナールって言いました？五十銀貨基準ではなく五十金貨基準って仰りました？」

「そうだ。安いかね？」

「い、いえいえいえ。ど、ど、どうぞどうぞ」

後から考えてみれば、もっとふっかけるべきだったかもしれない。だが、この時のムスタファは唐突で巨大な幸運に頭がまともに回っていなかった。相手の気が変わらないうちに、とっとと代金をもらうことしか頭になかった。何せ、五十ディナール、金貨ディナールで五十枚である。それだけの大金が入るのなら、今手元に抱えている奴隷をすべてこの男に渡しても構わないのだ。

さっさと契約書に署名し、代金を受領する。そういえば、この男何者なのだろう。五十ディナールもの大金を持ち歩いていることや、たかが奴隷一人のために書面契約するなど尋常ではない（普通は口頭契約だ。第一、ムスタファは自分の名前くらいしか書けない）。

——ひよっとして、とてつもない富豪なのか？流石に巫術師様ではないだろうが……。

ムスタファが男をじろじろと観察していると、彼は、

「足枷を外したいのだが？」

と、言ってきた。

幼児の顔の血を拭いながら——どうやら、大事はなかったようだ——男にムスタファは懐から取り出した足枷の鍵を渡す。ついでに一言、声をかけてやることにした。

「よかったな、小僧。手前みたいな奴に買い取り手があった」

ムスタファは心の底から幼児の売却を祝ったのだが、男は不快な声を上げた。

「違う。《唯一の神》は奴隷となつた者がいたら解放してやれと説かれている。私はこの幼子を解放し保護するだけだ。この子は最早誰のものでもない」

——訳わかんねえよ……

ムスタファはそう思ったが、口には出さなかつた。口に出すとまた《唯一の神》とやらについて、長々と語られるような気がしたからだ。とにかく、五十ディナルという値は破格である。これで当分食い扶持に困ることもない。そもそも、あんな体格不良で訳のわからない奴隷の子供に買い手があつたこと自体が僥倖である。意味不明とはいえ、これはめでたいことだ。だから、余計なことを考える必要はない。ムスタファは奴隷商人としてそう考えることにした。

「凄いつ！こんなに簡単に外れた」

いつの間に泣き止んでいた(推定)五歳児が驚きの声を上げる。錠が外れたことに感激したらしい。そして、既に外れた足枷の鍵の部分を何度も弄つて、遊び始める。

まるで、猿だな——と見下すムスタファ。だが、そんな嘲りにも気付く容子もなく、少年はぶつぶつと呟いていた。どうやら、こいつには独り言の癖があるらしい。

「そうかあ、ここに出っぱりがないと、ひっかからないのかあ。うーん、面白いなあ」

最初、その言葉の意味がムスタファにはわからなかつた。しかし、その子供の指先を注視すると、すぐに彼は目を見張ることになった。

なんと、そう言い出した少年の手には鍵が二つあつたのである。

一つはわかる。今、ムスタファが渡した鍵だ。見覚えもあれば、手にも馴染んでいる金属製のもの。では、その金属鍵の横に並べて、あの餓鬼がじろじろと見比べているあの木製の鍵はなんだ？ムスタファが見たこともなければ、どんな加工をして作ったのかもさっぱりわからないあの歪な鍵は……自作の合鍵だろうか？そういえば、最近やけによく足枷が外れ……

「まさか……!!」

思い当たつて、奴隷を集めてある檻の方に眼を向ける。彼らの何人かが怯えた顔でざわついていた。少年がムスタファの前で二つの鍵を見比べている事に動揺しているのだ。

その意味を察したムスタファは声を張り上げていた。

「き、貴様っ！」

だが、少年は憤るムスタファもざわめく檻の中の奴隷たちも、まったく気にしていなかつた。一心不乱に二つの鍵を見つめている。先程まで、血塗れで泣き喚いていたのが嘘のようだった。そして、突然、何かに得心がいったようで、自らの懐をもぞもぞとやり始める。すると、幼児の懐から、同じような木製の鍵がジャラジャラ、ジャラジャラと出てくる、出てくる。

「そ、そんなもの、どうやって……!!」

思わず詰め寄ろうとするムスタファ。しかし、その前に例の男が当然のように立ち塞がった。

「契約は既に交わしたはずだが？」

「そんな問題じゃねえよ！」

もう、手を出すことは許されない。淡々と断じられたムスタファは反射的に荒々しく怒鳴った。相手の正論を封殺するためだ。とにかく、あの餓鬼を摘み上げねばならない。そして、合鍵について問い質さなくてはならない。

ムスタファは男と議論するつもりなど毛頭なかった。構うものかと、幼児に近付こうとする。だが、いくらムスタファが男を躲して進もうとしても、必ず男は幼児の前に立つようしていた。右から回り込もうとすれば、右に動き、左から回り込もうとすれば、左に動く。ムスタファが凶暴な表情を作っても、男はまったく動じることはなかった。ただひたすらに幼児への道を遮る。ムスタファも客を押し退けて、突き進むことには躊躇いがある。

そうこうしているうちに、いきなり幼児はきやつきやつと喜びだした。その視線はただひたすらに己の手元にあり、ムスタファ達にはまるで関心を払っていなかった。どうやら、完全に適合する合鍵を見つけたらしい。今度はその合鍵とムスタファから受け取った鍵を見比べている。

だが、ムスタファは未だ幼児に近づけないままだ。

幼児を庇う男の静かで穏やかながらも、底知れない氣勢と——何よりも、瞬く間に男の周りに集まってきた精霊の気配にムスタファは身動きが取れなくなっていた。完全に威圧されきっていて、仲間を呼ぶ声すら挙げられない。

——こ、こいつ。

ここはそれ程精霊の密度が高い土地でもなければ、今はそれ程精霊の運動が激しい時期でもない。にもかかわらず、男の周りに淡い輝きが満ち満ちている。精霊が特定の個人と強力な情報連結をしている時に特有の現象だ。この干渉力は尋常ではない。精霊結晶を隠しているのか、あるいはこの男やはり巫術師様なのか。いずれにせよ——。

「わ、わかったよ」

……いずれにせよ、ムスタファはおとなしく恭順の意を示した。「その小僧には手を出さねえ」

つい、感情的になったが、よく考えれば、ムスタファに男と争ってまで、あの幼児に手を出す必要はない。どうせ、幼児はムスタファ達の元を離れるし、金はもう受け取っている。それも大金を。幼児がどうやって合鍵を手に入れたかなどこの際どうでもいいではないか。もし、万一、他の奴隷で同じ方法で合鍵を手にする奴が出てくるなら、それはその時に対処すればいい。

自分でも欺瞞だとはわかっていたが、ムスタファは己に言い聞かせた。

男の方もムスタファの考えを悟ったのだろうか。精霊の集束を中断し、一時の緊張を緩和する。心なしか、今まで揺るぐことがなかった眉間の皺も少しだけ緩んだ気がした。

……が、すぐに何か怪訝なものを覚えたらしく、ムスタファに敵しい眼差しを向けた。

「さて。そもそも、お前に小僧やら貴様やらと呼ばれる筋はないぞ。この子のことはちゃんと名前で……」と、そこまで言いかけて、また別のことが気にかかったらしい。今度は幼児に優しい眼差しで、「ふむ、幼子よ。お前の名は？」

「僕？」初めて幼児は鍵から、目を離れた。一通り鍵の仕組みを解き明かして、満足したのかも知れない。「僕はねえ、みんなにマジヌーンって呼ばれているよ」

ムスタファは『なるほど、そりゃ、ひつたりだ』と納得した。

マジヌーン——それは《狂人》あるいは《愚者》を意味する単語である。

が、どうやら、男の方は別の感想を抱いたらしい。すぐさまその眼差しを険しいものにする（忙しい奴だとムスタファは思った）。

「愚かな。それは蔑称ではないか。誇りこそ、人の礎であるぞ」

「蔑称って？」

子供には難しい言葉だ。小首を傾げている。

「お前とて、初めからマジヌーンと呼ばれていたわけではあるまい。本当はなんという名だ？」

「うーん、そういえば、昔、『お前は天の秩序をかき乱すものであり、光り輝くものから五つ目の輪を形なすものであり、彷徨うものでありながら、とても多くの風を付き従えるものだ』とかなんとか言われたような気がするー」

……ムスタファには訳がわからなかった。何かの神話だろうか？

それに——この少年、実は物覚えが滅茶苦茶いいのではなからうか？

「天の秩序をかき乱す？『彷徨うモノ』？それは《惑星》のことか？」

再び、小首を傾げる少年。男が何を言っているのか戸惑っているようであった。当然だろう。ムスタファにも、さっぱりだ。

「ううむ、光り輝くもの……日輪？五つ目の輪、五番目の軌道？……そうか、第五惑星《ディアウス》か！」

一人で得心した男。だが、男の中では何か別の問題が発生したらしい。

「しかし、お前をディアウスと呼ぶのはいささかなあ」

「僕はねえ、みんなにマジヌーンって呼ばれているよ」

「いや、勿論、この呼び名はお前の故郷での呼び名と同一ではないだろう。しかし、この国で生きるならば、この国にあった呼び名も必要かもしれん。そういった意味ではディアウスというのも悪くない呼び名なのだが……」

「えーと、僕の名前なんていうんだっけ？」

「ディアウスというのは元々、中近東<sup>ヘンド</sup>の偶像の名なのだ。何しろ、この国の天文学の基礎はそのほとんどが中近東<sup>ヘンド</sup>からの輸入だからな。しかし、偶像の名を唱えることはあまり好ましいことではない。《唯一の神》はあれで妬み深いお方だな。特に五書<sup>タウラート</sup>啓典などを読んでいると……」

「あの一、小父さん……?」

「む。小父さん?」

先程からのささやかな声によく男の方も気付いたらしい。

「私はラフマーンというものだ」男は教え諭すように少年に語る。「君から見れば、確かに小父さんかも知れない。だが、これから、私が君の面倒を見ることになる。名前くらいは覚えておきなさい」

「ふうん、じゃ、今日から、ラフマーンの小父さんは僕のお父さんになるんだ」

——五十ディナールもポンと出す金持ちが奴隷の餓鬼を養子になんてするかよ。

ムスタファアは内心哄笑したが、それを表に出すことはなかった。男の機嫌を損ねるとどうせろくでもないことになる。そもそも、この《慈悲<sup>ラフマーン</sup>深きもの》と名乗った男、あの小僧——もとい《頭のいかれたディアウス》以上におかしなところがある。ムスタファアの常識的な判断がどこまで通用するかは甚だ怪しい。

「違う。無論、お前が大人になるために必要なものは、我が命に代えても与えるつもりだ。

……だが、私は《アブールディアウスディアウスの父》にはなれない」

「どうして?」

「私は《唯一の神に帰依する者》だからだ」

……そろそろ、頭が痛くなってきたので、ムスタファアはその場から離れ始めた。

「《唯一の神》は養子を認めておられない。啓典の第三十三章、アル・アハザーフ部族連合章にそうあるのだ。勿論、《唯一の神》はお前のような子を保護し養育する事は大いに奨励なされている。しかし、お前には真の父母がいる。その者達の存在を軽んじ、私が勝手にお前の父を名乗ることは良くない。お前にも、故郷に父と母がいるのだろうか?」

「んー」幼児はしばらく悩んでから、無邪気に問い返した。「そうだったけ?」

「……覚えていないのか。まあ、幼さ故ならば仕方がない……。しかし、今の言葉をお前の父母が聞けばやはり悲しむだろう。まして、私がお前の父となれば、いずれお前は実の父と私を秤にかけることになる。それはとても残酷なことなのだよ。《唯一の神》はそれを禁じておられている。そして、私は《唯一の神に帰依する者》であることを証言<sup>シャハド</sup>したのだ。したがって、私はその御意思に従わねばならない。だから、私は《アブールディアウスディアウスの父》にはなれない」

「ふうん、でも僕は《イブンラフマーンラフマーンの息子》になれるよ」

「何故だ?」

「だって、僕は《ラフマーンの息子》だけど、《唯一の神に帰依する者》じゃないもん」

「……なるほど、そうだな」

男は初めて柔らかい笑みを見せる。その眉間の皺が消えた顔は苦笑にも微笑にも見えた。

「……啓典の第二章二五六節『宗教には強制があつてはならない。正に正しい道は迷誤から明らかにされている。それで邪を退けて神を信仰する者は、決して壊れることのない、堅固な取っ手を握った者である。神は全聴にして全知であられる』……か……そうだな、私としたことが『唯一の神』の御言葉を忘れるところだった」

「……？」

自らの何気ない一言に動揺をする男を少年は不思議がる。

「いや、先の言葉を改めよう。お前は私に解放されるまでもなかった。初めからお前は奴隷ではなかった。お前はこの世に芽生えてから、今日この時まで、ただ自らの魂のみよって、この天地を踏みしめている」

「……父さんの言うこと……難しい」

頭を抱えるディアウスをラフマーンは高らかに称えた。

「ディアウスは愚かではあっても、誇り高い男であるということだ」

\*\*\*\*\*  
\* 起・後編  
\*\*\*\*\*

「ああ、野心を抱くというのは愉しいものだ。これほどに様々な野心があって、私は嬉しい。限りなき様に見えるが、それこそが醍醐味だ。一つの野心を実現したかと思えば、また、別のものがより高みに輝いている。人の生に充実を与えてくれる」

……アン・シャーリー ルーシィ・M・モンゴメリ作『赤毛のアン』より

\*\*\*

あの日、八歳のディアウスが少女に出会った時、懐に飴玉は一つしかなかった。

庭で遊び呆けた後、木漏れ日とうとうしていると、父の声が聞こえた。すぐにディアウスは、自分が木に隠れて、父から見え難い位置にいるということに気付いた。そこで、ディアウスは少年らしい悪戯心を起こし、その小さな体躯を完全に木の陰に隠した。父がここを通りかかれば、いきなり飛び出て、脅かしてやろうというわけだ。

ところが、しばらくして、父の様子がいつもと違うことに気付いた。

謹厳を絵に描いた様な父だが、それでも家に着けばそれなりの柔和さを垣間見せる。『彼はいつも眉間に皺を寄せている』という評判は父を見慣れていない人の勘違いに過ぎない。父の眉間の皺にも寄せ具合というものがあるのだ。それは時と場合によって変化し、ごくたまに完全に消え去ることだってある。そして、最近、その違いをおぼろげながらも、判別できるようになってきた。母ヌーラに比べるとまだまだとはいえ、それは少年ディアウスの密やかな自慢でもあった。

そのディアウスの眼から見て、今日の父はちょっと様子が違った。眉間の皺の寄せ具合はいつもと変わらないので、別に機嫌が悪いというわけでもないのだろうが……何だか、ちょっと強張っているというか……仕事をしている様な近寄りがたい雰囲気だった。

よく見れば、父は二人の少女を伴っていた。一人はディアウスと同じくらいの歳、もう一人は五つほど年上だろうか？もつとも、二人とも、黒髪、直毛、黒瞳、小さな鼻に、黄色っぽい肌——という典型的な<sup>マシユリク</sup>東方人なので、よくわからない。元々ディアウスは人の顔や名前を覚えるのが苦手な方だし、普段あまり見かけない東方人の区別はなおのことつきにくい。会話を聞くまで男か女かもわからなかったし、二つの顔を並べば、姉妹だといわれても納得するかもしれない。

年上らしき少女の方はなんだか随分とごてごてとした着物に身を包んでいた。暑くないの

かなと、ディアウスは思ったが、彼女は汗をかくどころか、眉一つ動かすことはなかった。ごてごて少女は何やら父と話し込んでいたが、動いているのはその小さな唇のみであった。顔の他の部分は一切動かすことはなかった。

「……これはワジラとしてではなく、私、祝融個人の要請になるかもしれませんが……。よろしいですか、ラフマーン・イブン・イーサー・アル・イブン・アダム？」

丞相ワジラが意味することを、この時、戸籍年齢で七つだったディアウスはまだ知らなかった。だから、この時期まだまだ帝国は未成熟なんだなあとか、一介の商人に丞相自ら出向くこともあったんだなあとか、父はやっぱり凄い大富豪なんだなあとといった事に思いを巡らせることはなかった。加えて、狂王マルドゥックが放逐されたのはこの四年前であり、その際、アツザフル帝国初代丞相ワジラ祝融はその中核を担っていたはずなので、この時の彼女の年齢は少なく見積もっても——と、色々と懊悩するのも、ずっと後のことだ。

「世襲制巫術師は今こそ一掃せねばなりません。さもなければ、我々はまた神権政治から抜け出す機会を失ってしまう。一刻も早くこの地に王権政治を根付かせるべきであり、そのためには官僚制を整えなくてはなりません」

「……わかりました。要請を承諾いたしました。もともと、細部は書面を通させていただきますが」

「謝謝」  
シェーシェー

「しかし……意外ですな。皇帝スルタンの主権を確立するならば、親政が行われると思っていました」

「……三桁の足し算もできない皇帝が、ですか？」

「……かといって、世に賢人がいないわけではありません。例えば、かの《自然哲学における数学的諸原理》を世に示した……」

「あれは陛下よりも駄目人間です。所詮は引きこもり、ただの自然哲学オタクに過ぎません」  
「……手厳しいですな」

「別に彼らの使い勝手が悪いと言っているわけではありませんよ。あのオタク野郎の『運動の三法則』や『万有引力の法則』を発見した自然哲学者としての才能と、台風すらも引き起こす巫術師としての実力は紛れもなく帝国最高峰でしょう。また、陛下の野戦指揮官としての実力、また、見てくれのよさも認めます。……あいにく、頭の中身は駄目駄目でしたが……」

「……………」

「……はつきり言いましょう。狂王放逐を成し、易姓革命を謳ったものの、実情として我々は群盗と大差がないのです。偉そうにこの様なことを語る私とて、元は《夏シテ》の名もなき小国のそのまた妾腹の公主に過ぎません。行政経験といえば、ほとんど哀れみで賜った場末の県カレン——こちらでいう村カルヤの規模にあたる行政単位——を一つ統治していただけ。それも宮中タランにいる私に代官が一方的に贈ってくる書類をろくに目を通さず決裁するのみでした。わかり

ますか？その程度の小娘が丞相として、強大な権力を好き勝手に振るっている。振るわざるをえない。それが今のこの帝国の有り様なのです。民草があゝの狂王と比較しているから、善政などと呼ぶ声もあるようですが……」

「……この際、放逐した巫術師たちの仕官をお認めになつてはいかがでしょうか？よかれ悪しかれ、行政経験の豊富さは確かです。あなたが彼女達の手綱を握りさえすれば……」

「危険思想ですね。あなたでなければ、いえ、あなたであつても、この場に人がいれば、私がこの場で餓首か焼殺せねばならぬところですよ」

「……ならば、今のうちに言つておきましょう。このアツザフル帝国において、祭政一致は既に撤廃されました。最早、以前の如き苛政に戻ることはありませんまい。ならば、彼女達をことさらに政から遠ざける理由はないでしょう。純粋な行政効率の面からいえば、そちらの方が優れていると思われます」

「あなたは思い違いをしています。私は神ではありません。人です。あのマルドゥック達とは違うのです。人は老います。衰えます。いずれ死にます。その時、誰が彼女達の手綱を取るのです？また、人は有限です。無限の力を具える神と違い、私一人では力及ばぬことがこの世にはあるのです。帝国全土に配置した巫術師達の動きを私一人で、どこまで監視できるでしょうか？神なる彼女たちを操つて、政まつりごとを行うならば、なおのこと整備された官僚制が必要ではありませんか？」

「……なるほど、これは考えが足りませんでしたな」

「なにより、人間がいつまでも神々の奴隷でいるわけにはいかないでしょう？」

「……………」

「あら、失礼。《唯一の神》に帰依しているあなたの耳には逆らう言葉でしたかしら？」

……その辺りでディアウスは耳を傾けることを止めようかと思つた。彼なりに理解に努めたのだが、はつきり言つて、七歳児にはさっぱりわからない会話なのだ。

「あなた、鬼子オニゴ？」

ディアウスははっとした。

その言葉は同い年の方の少女のものだった。いつの間にか、彼女は木陰に潜んでいた少年の前に立っていた。

光を飲み込む岩戸の様な黒洞の双眸——少女が少年をじつと見つめている。

「う、ううん。僕は先天的干渉力欠落症ではないよ」

その時のディアウスはうまく呂律が回つていなかった。少女が語つたアツザフル語はアンミーヤ通俗語とも呼べないほどに訛つていたのに、ディアウスの標準語フスハーの方よりも、遙かに優雅に聞こえたのをはつきりと覚えていた。

「確かに僕の干渉力は凄く弱いけど、一応あるんだ。ちゃんと祝詞を考えて言霊を唱えれば、

そよかせ微風くらいは起こせるよ」

すると少女はさらにしばらくディアウスを見つめてから、「本当だ」と言った。彼の言を確かめたらしい。「ちゃんと干渉紋がある。でも、あなたは精霊に嫌われているのね？」

「うん、好かれてはいないと思う」

そこで話題が途切れる。

何故かディアウスは落ち着かない気分になった。不思議だった。いつもなら人と話している時も、よくぼんやりとするのだが、この少女の前だとしてもぼんやりできそうにない。もしかして、この少女の格好が珍しいから、気になるのだろうか？なるほど、たしかにディアウスにはへんてこりに思える。

何しろ、この女の子が着ている服ときたら、服というよりも布切れなのだ。それも、雑巾に使うような汚い類の。あの父と話していた人は、きらきら光ってとても重そうな服を着ているのに。眼前の少女はまるで灰を被ったかのように埃にまみれている。明るい色といえば、唇の薄い朱ぐらい。髪も、伸ばし放題のものを後ろで束ねているもの、ぼさぼさなので、まるでたごみ鬘たごみみたいに見える。しかも、その手足は恐ろしく細く、骨格が見えかけている。ディアウスも『お前は痩せ過ぎだ。もっと食べて、もっと太りなさい』と父に口うるさく言われる程に華奢な体躯だが、この少女ときたら、明らかに自分よりも細い。

そこでふと少年は気づいた。さっきから、少女もずっと黙ってこちらを見つめている。

一瞬、自分の格好がどこかおかしいのかと思った。しかし、母は身だしなみに気を使う人だ。少年が昼寝をしていると勝手に汚れた服を着替えさせ、ぼーっとしていると少年の服の乱れたところを直しにかかる。だから、自分があのおんぼろ少女よりもおかしな格好のはずがないのだ。

そもそも、何故この娘がこの家の庭にいるのだろうか？しかし、その理由を知るであろう父の姿は既に見当たらなかった。丞相とか名乗った女の子と何だか難しい話を続けたまま、屋敷の中に入っていったのだろうか。いずれにせよ……。

少年は少女と二人きりになっていた。

「……」

「……」

……とにかく、少年は少女と仲良くしようと考えた。

そこで懐から母からおやつに貰った飴玉を取り出すことにした。この甘いお菓子を少女にあげれば、きつと喜んでもらえるだろう。仲良くなれるだろう。そう思って、少年は飴玉の包み紙を解いた。

ところが、その瞬間、少年の身体は地面に転がった。

最初わけがわからなかった。だが、眉間がずきずきして、みるみる涙が溢れて……ようやく、自分が叩かれたのだと理解した。

少女がその右手を開くと、手の平に白い飴玉が現れる。

唇の中から、はっきりと朱い舌は伸ばし、少女は舐めとるように飴玉を乗せた。そして、ゆっくりと口に含んでから、奥歯でガリガリと噛み砕く。

……訳がわからなかった。

「何で……？ どうして……？」

「何か疑問でも？」

少女は興味深そうに少年に問い返す。

「どうして、僕を叩いたの？ 僕、何か悪いことしたの？」

少女は初めてくつくつと笑みを見せた。伏せる少年を見下している様にも見える。

「面白いことを言うのね、あなた」

——蛇みたいだ。

少年がそう思った笑みが嘲りであったのだと知るのは随分後のことだった。

その時、少女は翦せんと名乗った。